# 明治期の日本養蚕業と養蚕書

## ——出版状況の検討——

土　金（土井）　師　子

［要旨］日本における養蚕の技術専門書いわゆる養蚕書は、江戸期において約百点刊行されていた。その特徴は、①信仰的な要素を含んだ飼育の説明から経験・実地に基づく技術を重視した飼育の説明へと変化したこと、②著者は主として、各地方における蚕種製造家であったこと、などが指摘されている。一方、明治期における養蚕書の特徴については、今まで、その特徴や出版実態などについては、多くは言及されていない。加えて、明治期には、定期刊行物として養蚕に特化した雑誌が登場したことも、江戸期とは異なる新しい変化であるが、これについても、先行研究が乏しい。

本稿では、近代において、養蚕飼育がどのように広まり、定着していったのか、近代養蚕業の展開過程を考察する試みのひとつとして、明治期に出版された養蚕書の特徴を考察した。国立国会図書館を主として、所蔵先をいくつか絞り、「蚕」「繭」をキーワードに書誌情報を調べ、養蚕書が約千点出版されていたことを確認した。養蚕書の内容については、幕末のそれ同様、主として飼育温度が特徴としてあげられるが、明治期の特徴としては、飼育温度に付随する形で発生し得る蚕病や桑樹栽培法の改良の仕方、夏秋蚕飼育の項目が出てきたことであった。また、蚕種製造家だけでなく、一般養蚕家や政府関係者の著書が増加した。出版社（者）や取り扱い書肆については、江戸期からの三都書肆だけではなく、有隣堂・明文堂など新たな出版社が登場したことが特徴であり、近代養蚕技術ひいては養蚕書の普及に貢献したと考えられる。

［キーワード］養蚕書、農業書、有隣堂、明治期、新興書肆

## はじめに

近世期以降、自身の経験を元に、養蚕方法をまとめた書物として、養蚕書が出版された。近世～明治初期までの養蚕書を網羅的に取り扱い、一冊一冊の特徴を記した、奥原国雄氏によれば、近世期の養蚕書は約百点あり、養蚕書は、主として蚕種製造家（種師）や蚕種販売家（蚕種商人）との関わりが強いものであったとする。[1] さらに、井上善治郎氏は、近世期の養蚕書について、そのほとんどが木版本で、蚕種家が営業上利用した場合が多いことを指摘している。販売した蚕種の代金は、販売当年と翌年に分けて回収するため、農家が上作してくれることが代金回収のための必要な条件で、違作のないように、養蚕術を伝授しながら、売り込む必要があったこと、これが近世期に養蚕書が成立した背景であっ

たとする。[2]

養蚕書の研究は、これまで近世期における農書研究の一環として行われてきた。近世期の養蚕技術と養蚕書に関して、井上氏は、幕末期の中村善右衛門著『蚕当計秘決』[3]において、桑品種の選択とその観察能力および蚕当計の発明を評価しており、温度の計測が可能となったことで、飼育技術が飛躍的に向上し、以降、養蚕技術の焦点は火力の応用となったとしている。[4]

また、杉仁氏は、近世中期の養蚕技術の発展以降、呪術的・仏教的な思想から脱却し、養蚕の理に役立つ技術者的・生産者的精神を強める主張が見受けられるようになったと分析している。[5]この他、個別の養蚕書の内容を検討、紹介するもの[6]や幕末に翻訳されて海外に紹介された養蚕書の研究[7]などがある。後者において、加藤詔士氏は、自国に向けて、養蚕書の翻訳紹介を行った、お雇い外国人ムリエを取り上げている。ムリエは、日本養蚕業の現状をフランス国内の講演会にて紹介し、海外で流行していた蚕病対策の観点から、日本養蚕業は、桑の木の手入れの丁寧さ、蚕を密集させない薄飼と蚕室の換気、蚕室温度を上げ過ぎない点が優れている、とした。

これらの先行研究より、近世期の養蚕書が、主として①蚕種家や蚕種商人により記述され、流通されたこと、②違作を防ぐための技術書であったこと、③蚕の飼育に関しては、天然の気候に任せた飼育が一般的であったが、幕末以降、蚕室を温める火力の使用が焦点となり、製糸用繭の生産量増加を見込んだ場合、自然に任せる育蚕の限界が浮き彫りとなったことが分かる。

明治以降、蚕糸業が重要産業として急速に発展した背景には、養蚕を学ぶための仕組みが整備されたことが重要で、近世期とは異なる近代養蚕業の特徴である。官民それぞれによって、蚕糸試験場・伝習所が設立されたことや共進会・博覧会の開催、蚕糸業組合の設立など、明治期に導入された組織的な動きによる成果は言うまでもないが、これらに加えて、養蚕書や養蚕雑誌などの媒体も養蚕業発展に十分寄与したと考えられる。

明治期の養蚕書研究に関しては、明治期の養蚕書から養蚕技術の変化をまとめた『日本蚕糸業史』があるが、養蚕書を網羅的に検討するというよりは、養蚕技術を記載するための引用文献として使用されている。一方、三好信浩氏は、明治以降の各分野の産業啓蒙書の目録を作成するにあたり、養蚕書も取り上げている。その中で、明治初期のそれは、伝統的技術の改良を試みたものが多いと指摘し、西洋の翻訳書の出版などにより、西洋と中国の養蚕技術の導入と伝統技術の改良が課題であったとする。[8]また、各養蚕書の解説としては、鮎沢啓夫[9]や松村敏氏の研究[10]がある。特に、松村氏は、明治五（一八七二）年と同一二年に出版された田島弥平著『養蚕新論』の解説において、蚕品種と飼育法との関係を指摘し、田島弥平が考案した清涼育という飼育法は、意識的に換気を行いながら行うため、自然に任せた飼育法とは異なるものであると評価し、明治期の育蚕技術については、地域や品種による飼育法の多様性、夏秋蚕製造の発達、夏秋蚕製造に伴う飼育形態の多様性の促進、桑栽培の動向など多くの変化があったとする。

さらに、勝亦達夫氏は、建築史の観点から、国立国会図書館と信州大学所蔵書（二〇一〇年時点）より蚕室と飼育法に関する記述がある養蚕書を抽出し、飼育法の変化による蚕室の建築様式の変化について分析している。[11]勝亦氏は、明治期において、清涼育→温暖育→折衷育と飼育法の流行と共に蚕室の様式も変化するが、各飼育法に共通する構成要素は、

火炉であり、近代蚕室に欠かせない要素であった、とまとめている。

以上より、明治期の養蚕書は、主として、幕末以降より争点となった飼育法と火力の加減に伴う養蚕技術の改良が主たる要素であったことが分かる。技術書として、明治期の技術過程を追う大変重要な史料であるが、明治期の養蚕書がどの程度出版され、近世期のそれとどのような点で異なるのか、または同じなのか、未だ不明な点が多い。そこで、本稿では、明治期に出版された養蚕技術に関する出版物から養蚕書を抽出し、特徴を明らかにし、近代養蚕業史の技術傾向を再確認していきたい。

## 一、養蚕技術関連の出版物と養蚕書

### 一―一　養蚕書の数

本稿では、国立国会図書館、信州大学付属図書館、東京大学図書館、東京工業大学図書館のオンライン蔵書検索（opac）にて「蚕」「繭」「糸」「桑」をキーワードに検索を行い、その検索結果を基本情報とし[12]、明治期（一八六八～一九一二）に刊行された養蚕書の一覧表を作成し、これに基づいて検討を行う。検索結果から、商業関係や法律関係、官報（蚕種検査関係は除く）などを除くと、蚕業技術に関する書物は、下記の通り、7つに分類することができた。

①養蚕書…養蚕全般を記した養蚕書、講話筆記録、桑樹栽培、蚕病書、図表など

②共進会や品評会報告書…博覧会や共進会、品評会、実業大会などの報告書

③理学書…農業書や動物学書、植物学書、昆虫学、害虫駆除などの理学専門書

④記録・報告書…中央や地方官庁の蚕糸または農業試験場の調査報告書、各国視察報告、会議録など

⑤外国書…中国やイタリア、フランスなどの海外養蚕書

⑥逐次・定期刊行物…養蚕雑誌や農業雑誌、勧業雑誌、試験場の研究試験成績、年報

⑦その他…製糸技術書、織物技術書、染色技術書、小学・中等教育の理科教科書、蚕業学校入試対策本など

このうち、①の養蚕書については、約1、100点を確認することができた。今回は、①の抽出に重点を置き、②～⑦については、今後、ひとつひとつの分類において、さらに調査機関を増やし、関連するキーワードで調査を行い、養蚕技術関連出版物の総数の把握につとめたい。今回の抽出結果にて、近世期と明治期の養蚕書数を比較すると、およそ十倍にもなり、養蚕技術の動向を記す出版物は急速に増えたことが分かる。表1は、各年に発行された養蚕書の書名数を示すもので、約1、100点の養蚕書がどの年代に出版されたのかを示す。なお、初版の年を基本とし、再版以降の増版は、総数には含んでいない。これによれば、養蚕書の数は、明治十年代後半に徐々に増え、一八八八年に最も多くなってから、おおよそ年に30～40程度の数で推移している。なお、紙幅の関係上、作成した一覧表のうち、明治十年代までに出版された養蚕書の一覧を本文末に掲載した。

表1　明治年間における養蚕書数

| 明治初年 | 1 | 1890 | 49 |
|---|---|---|---|
| 1869 | 3 | 1891 | 37 |
| 1870 | 3 | 1892 | 43 |
| 1871 | 3 | 1893 | 43 |
| 1872 | 3 | 1894 | 46 |
| 1873 | 7 | 1895 | 45 |
| 1874 | 6 | 1896 | 28 |
| 1875 | 4 | 1897 | 31 |
| 1876 | 2 | 1898 | 34 |
| 1877 | 6 | 1899 | 28 |
| 1878 | 2 | 1900 | 26 |
| 1879 | 8 | 1901 | 25 |
| 1880 | 3 | 1902 | 38 |
| 1881 | 4 | 1903 | 37 |
| 1882 | 8 | 1904 | 28 |
| 1883 | 15 | 1905 | 24 |
| 1884 | 21 | 1906 | 30 |
| 1885 | 10 | 1907 | 29 |
| 1886 | 12 | 1908 | 42 |
| 1887 | 24 | 1909 | 46 |
| 1888 | 81 | 1910 | 28 |
| 1889 | 40 | 1911 | 34 |
| | | 1912 | 23 |
| | | 年代不詳 | 27 |
| | | 合計 | 1087 |

出典）筆者作成の明治期養蚕書数一覧による。一覧表の概要は、本文および論文末註12を参照。

## 一―二　著者出身地と出版地

抽出した養蚕書のうち、表2は、著者出身地と出版地の一覧表である。著者については、奥付や表紙に記された住所や寄留先を基本とした。

表2によれば、著者出身地、出版地ともに、東京、長野、群馬、福島が上位を占めている。出版地については、四県で約五．五割を占め、近世期以来の伝統的養蚕地帯と中央官庁のある東京に集中していたことが分かる。東京については、全国各地の養蚕家または養蚕団体による出版を行う一方、内務省や農商務省蚕業試験場関係者らの書物の出版を行っていることが特徴である。一方、長野、群馬、福島などの地方の出版は、地元の養蚕家や蚕種家の出版、他府県から寄留している人物が著したもの、民間の蚕業教師や農商務省の技術者を地元へ招いて開かれた蚕業講話会の筆記録を出版している。

著者については、長野県が最も多く、明治期における長野県の技術改良への関心度の高さがうかがえる。長野県については、小県蚕業学校長の三吉米熊や同所の教師による講話筆記録もあるが、主として県内の蚕種家や養蚕・蚕種組合などの経験や試験を基に独自に出版された養蚕書である。なお、明治三十年代以降、同県より出版された養蚕書は、夏秋蚕関連のものが多く、夏秋蚕飼育の中心地として、明治期を支えたことが分かる。

一方、東京は、主として東京蚕業講習所や農科大学に在籍する技術者や農学士によるところが大きい。明治十年代以降、中央政府の養蚕技術者は、地方官庁や民間の会社や組合などに招聘されて、養蚕技術の講演を行う機会が増え、講話筆記録が多く出版された。彼らは、蚕業教科書や地方の蚕業試験場教員向けの教授手引きなども著し、蚕業教育の標準を提示する一方、最新の研究動向をまとめた研究書も著した。

表2　養蚕書の著者出身地と出版地（上位15府県）

A　著者出身地

| | 出身府県 | 割合 |
|---|---|---|
| 1 | 長野県 | 17.3% |
| 2 | 群馬県 | 9.6% |
| 3 | 福島県 | 9.1% |
| 4 | 東京府 | 9.0% |
| 5 | 山梨県 | 4.5% |
| 6 | 愛知県 | 3.7% |
| 7 | 埼玉県 | 3.5% |
| 8 | 静岡県 | 3.1% |
| 9 | 茨城県 | 3.0% |
| 10 | 三重県 | 2.4% |
| 11 | 福井県 | 2.3% |
| 12 | 島根県 | 2.2% |
| 13 | 兵庫県 | 2.1% |
| 14 | 京都府 | 2.1% |
| 15 | 岡山県 | 2.1% |

B　出版地

| | 出版地 | 割合 |
|---|---|---|
| 1 | 東京 | 33.9% |
| 2 | 長野県 | 11.5% |
| 3 | 群馬県 | 5.2% |
| 4 | 福島県 | 4.8% |
| 5 | 不明 | 3.5% |
| 6 | 山梨県 | 3.1% |
| 7 | 静岡県 | 2.9% |
| 8 | 愛知県 | 2.9% |
| 9 | 茨城県 | 2.2% |
| 10 | 埼玉県 | 2.1% |
| 11 | 新潟県 | 2.1% |
| 12 | 京都府 | 2.0% |
| 13 | 三重県 | 1.7% |
| 14 | 島根県 | 1.7% |
| 15 | 山形県 | 1.6% |

出典）表１に同じ。
註）表A：奥付に出身地が記載されている養蚕書779冊の割合。
　　表B：養蚕書総数1087冊の割合。

## 一―三　明治期の養蚕書と農業書肆・有隣堂

明治期の養蚕書は、著者や編者が出版者も兼ねる、いわゆる自己出版のものが多数存在するが、その一方で、東京や地方の書肆が出版しているものも多かった。明治期の養蚕書の特徴として、広告類が本文の巻末に、掲載されている点も特筆すべき点であろう。出版元が書店の場合、各書店の販売目録も掲載され、関連する既刊の養蚕書や新刊の案内などを見ることが出来た。また、出版元が地方の私立養蚕伝習所や蚕種家の場合は、伝修生の募集や蚕種販売広告が同様に巻末に掲載された。近世期の養蚕書と同様に、自身の蚕種販売の促進を担う手段として、重要な要素であったことが分かる。

また、自己出版による本でも、改訂版の際に、出版元が大手書肆や地方書肆に変わっている場合もあり、書肆に出版を委ね、販路を広げることで、自身の養蚕飼育への考え方や蚕種の品質を、より広い範囲に知らせることが出来るようになったと考えられる。

なお、出版地については、前述した通り、東京での出版が最も多かった。明治期において、東京で養蚕書が多く出版されたのは、全国的に売り捌く東京の大書肆（書店）の他、明治に入ってから新しく開業した新興書肆の存在も重要であろう。

表3は、抽出した養蚕書の中より、三書名以上を出版した出版元の一覧である。これによれば、有隣堂という東京の書肆が他を圧倒して、出版数が多く、明文堂、丸山舎がこれに続く。表3は、出版のみの数であるが、この三書肆は、別の出版元が出版する多くの養蚕書においても、特別予約販売所や大売捌所として奥付に明記された。さらに、印刷所としてのみ、奥付に記載がある場合もあり、出版、販売、印刷を行う総合書肆でもあったことが確認できる。

表3　三書名以上発行している出版元

| 出版元 | 所在地 | 書名数 |
|---|---|---|
| 有隣堂（穴山篤太郎） | 東京府 | 74 |
| 明文堂（周防初次郎） | 東京府 | 41 |
| 丸山舎 | 東京府、京都府 | 36 |
| 博文館 | 東京府 | 25 |
| 興文社 | 東京府 | 13 |
| 青木嵩山堂 | 東京府、大阪府 | 8 |
| 温故堂（内藤伝右衛門） | 山梨県 | 7 |
| 博向堂 | 福島県 | 6 |
| 興農館 | 埼玉県 | 6 |
| 山梨蚕友会 | 山梨県 | 4 |
| 進振堂 | 福島県 | 5 |
| 六盟館 | 東京府 | 4 |
| 勧業書院 | 東京府 | 4 |
| 丸善 | 東京府 | 3 |
| 求光閣 | 東京府 | 3 |
| 百木書籍部 | 京都府 | 3 |
| 浜本明昇堂 | 兵庫県 | 3 |
| 長島為一郎 | 埼玉県 | 3 |
| 富山房 | 東京府 | 3 |
| 中央蚕業学会 | 長野県 | 3 |
| 成美堂 | 東京府 | 4 |
| 蚕業之燈社 | 茨城県 | 3 |
| 出雲寺萬次郎 | 東京府 | 3 |

出典）表1に同じ。

書肆について、少し詳しくみていこう。『蚕業大辞書』[13]には、蚕業書肆の項目があり、この三書肆が主たる書肆として掲載されている。各書肆の詳細は、下記の通りである。[14]

（1）有隣堂…〔所在地〕東京府京橋区南伝馬町
〔経営者〕穴山篤太郎
〔創　業〕一八七四年
〔沿　革〕初代篤太郎は、奈良県郡山藩出身の藩士で、同藩では勧業などに従事。辞職後、京都に出て、書籍業の村上勘兵衛に雇われ、東京支店に転勤。一八七四年に独立し、殖産興業に関する出版と販売を開始。二代目篤太郎は、慶應義塾で学び、一九〇四年以降、書籍業に従事し、一九一〇年に家督を相続した。

（2）丸山舎…〔所在地〕千葉県安房郡大山村→東京府芝区高輪南町→同府日本橋区箔屋町
〔経営者〕竹澤章
〔創　業〕一八八七年
〔沿　革〕竹澤は、一八八五年より上京して同人社にて学び、帰郷後、千葉にて開店。再び上京し、[15]東京にて営業を開始。蚕業器械および蚕糸業書の販売を開始し、養蚕雑誌『蚕業新報』を発刊。一九〇四年より印刷所を併設。他に章光閣の商号あり。京都、大阪に支店あり。

（3）明文堂…〔所在地〕東京府神田区美土代町→同府同区錦町[16]
〔経営者〕周防初次郎
〔創　業〕一九〇一年
〔沿　革〕周防は愛知県名古屋出身。一八九〇年に上京し、有隣堂の穴山篤太郎に雇われ、九年の勤続後、独立。農芸に関する書籍を取り扱う。

三書肆の中でも、創立年の早い有隣堂は、主として、明治十～二十年代に養蚕書の出版と販売に携わり、明治三十年代後半になると、出版数は衰え、丸山舎や明文堂の出版が増加する傾向にあった。有隣堂は、農商務省設立以降、同省の法令や公報類をはじめ、農商工関連の図書、明治十年代の博覧会・共進会の報告書など、やや独占的ともとれるほど、官工庁の出版物の出版を担当し、版権を持った。[17]このように一般的な農業や養蚕書だけでなく、公的出版物も担当するなど、明治期の養蚕書出版において、特異な存在であったことは間違いないであろう。

このように、明治期の養蚕書は、自己出版以外では、江戸時代から引き続く大店の旧書肆ではなく、明治期に設立された新興出版社が中心となって出版されていたことが分かった。この他、表中にある、養蚕や農業の専門書肆ではない、博文館、六盟社、（冨）富山房なども新興出版社による出版も確認できた。[18]

## 一―四　内容の傾向について

明治十年代までの養蚕書は、蚕を神や仏などに準えて信仰的要素を含むもののほか、体系的な養蚕書（製種、掃立、蚕具の使い方、病蚕の種類、栽桑方法、桑の与え方など項目ごとに説明してあるもの）があった。しかし、どちらも自身の経験を主として記すものである。また、中国やヨーロッパの翻訳書も一定数出版されており、前述した三好氏が指摘しているように、これまでの養蚕法に新しく海外の養蚕技術を取り入れようとする試みがあったことが分かる。

明治十年代に入ると、呪術的要素を含んだ書はほぼなくなった上、翻訳書の出版は少なくなり、ほぼ全てが自身の経験をまとめた体系的な養蚕書であった。また、『山繭筒飼養法概略』[19]、『柞蚕飼養実験録』[20]、『印度種天蚕飼養手引草』[21]など、桑を食べる蚕ではなく、繭質は劣るが、野蚕または山繭と呼ばれる、桑以外の飼料で育つ養蚕についての養蚕書が出版されている点も特徴である。内務省の新宿試験場では、一八七五年と一八七六年に山繭の飼養試験をおこなっている。[22]中国古代から飼育されている野蚕の柞蚕については、『柞蚕飼養実験録』が詳しい。同書によれば、明治一一年に、内務省勧農局の依頼を受けて、外務書記官の松延玹が中国の北京にて、柞蚕の好む樹木について現地で聞き取りを行って

いた。また、同年、開拓使においても柞蚕飼養試験が行われるなど、野蚕への関心とそれに対応する養蚕書が一定数あったことが分かる。桑の消費と経済的問題を解決できる、将来見込みのあるものとして期待され、その飼育の基礎は、中国の養蚕書や中国現地より学ぼうとする動きがあったことは、明治期の養蚕業の特徴であろう。

さらに、先行研究の通り、『蚕飼方法宝之庫』[24]、『温養蚕事図解』[25]『養蚕手引草』[26]のほか、飼育温度を明記していることが増え、飼育に際しての火力の加減が養蚕書の一つの要素となっていることも確認できる。

明治二十年代に入ると、明治一九年に発布された農商務省令・蚕種検査規則により、蚕種検査が開始されたこともあり、蚕種検査の手続きに関する手引きや蚕種蚕病の解説書、顕微鏡の使い方などを著したものがあった。[27]さらに、飼育法に関しては、これまで火力の応用が争点となっていたものが、農商務省蚕業試験場技手であった、松永伍作が養蚕飼育標準表を公表したことにより、[28]火力を使いすぎない、折衷育と呼ばれる飼育法が一定の見解となったことで、各養蚕書にも「飼育標準」というキーワードが登場してくる。[29]この標準表は、明治二十年代に、各地で技術者たちの蚕業講話が増えたことで、[30]直接、当業者に説明する機会が増え、一層浸透していったものと考えられる。

明治三十年代は、引き続き、講話筆記録が出版される一方で、[31]夏秋蚕に関する養蚕書[32]が急増し、夏秋蚕種の改良や、普及に伴う桑樹荒廃、蚕病の増加に言及した著書が出版されている。また、中等教育向けの蚕業教科書の出版が増えている点[33]も特徴である。地方に養蚕伝習所や蚕業試験場が設置し始められたことで、専門的な学術書や教科書が必要となってきたためである。その一方で、蚕業講習所の技術者や農学士らの著書は高尚過ぎるとして、実地に基づく、平易で分かりやすい一般養蚕家や婦女子向けの養蚕書も出版された。明治三十年代は、蚕病学や蚕体学などを実際の養蚕にどのように生かしていくのか、「実地」と「学理」がキーワードとしてあげられる。

明治四十年代になると、三〇年代同様、蚕業教科書[34]が出版され、蚕体病理学や蚕体生理学など、蚕糸学の専門書も引き続き出版されている。また、春夏秋蚕の普及に伴い、各季節の養蚕に対応するための桑の仕立て法と植栽法、桑の摘み方、与え方に言及した養蚕書も出版された。[35]

## おわりに

以上、明治期の養蚕書について、出版状況を中心に検討してきた。近世期の養蚕書は、主として蚕種家や蚕種商人が、自身の経験に基づいてまとめたものであったのに対し、明治以降のそれは、経験豊富な蚕種家だけでなく、農商務省蚕業試験場や各府県農事試験場・蚕業学校の技術者、養蚕伝習先での伝習をまとめた一般養蚕家によるものなど、著者に変化が見られた。この変化は、明治以降、養蚕技術を学ぶ機会が増えたことによるものであろう。

また、著者が出版を兼ねている、いわゆる自己出版も多いが、明治期の養蚕書の出版においては、東京の農業書肆・有隣堂の存在は大きかったと考えられる。明治後期になると、明文堂や丸山舎は、東京および京都蚕業講習所の技術者や農学士らが著した、蚕糸業シリーズ本を出版するなど、一般養蚕家による養蚕書だけではなく、より学術色の強い養蚕書の出版が増えた。

こうした東京の新興書肆の一方で、山梨県の温故堂[36]や福島県の博向堂など地方書肆による養蚕書の出版も重要であり、現存せずとも、地方で

しか流通しなかった養蚕書があったことは推測でき、東京の書肆と地方書肆のネットワークなども分析できれば、より実態をつかめるであろう。

以上、本稿の検討により、蚕室温度や夏秋蚕の導入による桑畑荒廃・蚕病対策など、これまでの先行研究で指摘されている技術の変化を、養蚕書の出版状況においても確認できた。

明治二十年代までは、自身の経験談や蚕業講話筆記録などの出版が多かったのに対し、三十年代以降は、中央蚕業技術者たちが著す学術性・専門性の高い教科書や研究書が出版された。三十年代以降、こうした専門的養蚕書と、実地（現場経験）重視の養蚕書と性格が分かれていくこととなった。

また、中国産の柞蚕・多化蚕をはじめとした海外産蚕種の研究や蚕種蚕病予防のための顕微鏡の導入など、日本の養蚕業が、海外から新しい影響を受けていたことも確認できたが、その一方で、明治期の養蚕業は、国内の蚕種家や養蚕家が蓄積した基本的な養蚕技術に学ぶ部分も多かったことも確認できた。

## ＜明治10年代までに出版された養蚕書一覧＞

| 書名 | 著者 | 出版・販売元 | 出版年 | 所在確認先 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 機織彙編１～５ | 大関増業 | 須原屋茂兵衛 | 明治初年 | 農工大、国会 | 文政12年の増補版。1903博文館より復刻。発行は東京、近世期よりの京都・大坂・東京の書肆にて販売 |
| 蚕種商法 | 吉田屋表二郎述 | 上州屋惣七 | 1869 | 国会 | 出版は東京、国会所蔵は下巻、明治文化全集９巻所収 |
| 蚕種説 | カルマルス／柳川春三訳 | 吉田屋 | 1869 | 信大 | 出版は東京 |
| 西洋新説蚕飼の栞 | 出浦銑之助訳 | 須原屋平（半？）佐衛門 | 1869 | 東大、蚕糸文庫 | 出版は京都 |
| 苧麻培養製糸略図説 | 静田権太郎 | 織元商社 | 1870 | 東大 | 出版地不明 |
| 蚕桑要略 | 牧啓次郎 | 須原屋茂兵衛 | 1870 | 信大 | 出版は東京 |
| 養蚕新書 | 白井篤治 | | 1870 | 三好書 | 出版地不明 |
| 蚕桑図解 | | 彦根藩 | 1871 | 国会 | 滋賀 |
| 養蚕拾遺篇　上下巻 | 浜野章吉 | 笠岡製糸場 | 1871 | 国会 | 岡山、蚕糸文庫に1873年刊の所蔵あり |
| 山蚕やしなひ草 | 椎猿陳人 | | 1871 | 国会 | 出版地不明 |
| 教草 | 博覧会事務局 | 1882より版権；穴山篤太郎 | 1872 | 国会 | 『養蚕手びき草』南部陳 撰 宮本三平 画、『生絲製法一覧』信夫粲撰 溝口月耕画、『野蚕養法一覧』信夫粲述 菅蒼圃画収録 |
| 養蚕新論 | 田島弥平（邦寧） | 出雲寺萬次郎 | 1872 | 国会 | 著者は群馬県、出版は東京 |
| 樹桑抜萃　養蚕手引草 | 朝野泰比古 | 玉山堂ほか | 1872 | 国会 | 出版は東京 |
| 桑苗簾伏方法 | 船津伝次平述 | 熊谷県 | 1873 | 国会 | 両者とも熊谷県原之郷村 |
| 新撰養蚕往来 | 加藤祐一 | 積玉圃 | 1873 | 国会 | 出版は大阪 |
| 農蚕必要耕作日読往来 | 橘槙一郎 | 文江堂 | 1873 | 国会 | 出版は東京 |
| 山蚕飼立仕様法 | ― | | 1873 | 国会 | 同内容で出版年不明の「弘業会社山蚕飼立仕様法」あり |
| 山蚕養法：全 | 佐伯義門 | 笠岡製糸場 | 1873 | 東大、国会 | 出版は岡山県 |
| 養蚕事実　上中巻 | 佐貝義胤口述/加藤祐一補、門人・吾彦正吾聞書 | 賭春堂 | 1873 | 国会 | 出版は大阪府 |
| 養蚕輯要補 | 玉井市郎治述、舘三郎補 | 吉田屋清兵衛 | 1873 | 国会、蚕業大辞書 | 著者は長野県松代、出版は東京 |
| 養蚕略説并表式 | 宮川五平次 | 玉井忠造 | 1874 | 国会 | 著者は岐阜県笹松村、玉井は笠松とあり |
| 実地新験生糸製方指南　養蚕輯要補後編 | 舘三郎 | 吉田屋清兵衛 | 1874 | 国会、蚕業大辞書 | 著者は長野県埴科郡松代町、吉田屋は東京 |
| 養蚕事誌　上下巻、附録 | 浦川親満 | 浦川親満 | 1874 | 国会、蚕糸文庫、蚕業大辞書 | 著者は山梨県、1875甲府書林温故堂・内藤傳右衛門により出版 |
| 西説実験養蚕理解全３巻 | ベンムルー著／原田道義訳・伊東祐敦補 | 青藜閣 | 1874 | 国会 | 奥付に武州旗羅郡・福島栄次郎とあり、青藜閣は東京 |
| 西洋養蚕新説　文 | 黒田行元訳 | 文明書楼 | 1874 | 国会 | 出版は東京 |
| 養蚕説 | レーベ著／杉山親訳 | 玉山堂 | 1874 | 国会 | レーベはドイツ人、出版は東京 |
| 蚕桑弁 | 野村義雄 | 玉潤堂 | 1875 | 国会 | 出版は三重県 |
| 養蚕全書　上下巻 | 石幡吉三郎 | 開拓使 | 1875 | 国会 | 1890石幡吉三郎より増補再版、著者は福島県伊達郡 |
| 蚕桑余事 | 田島定邦 | 出雲寺萬次郎 | 1875 | 信大、国会、蚕業大辞書 | 著者は群馬県佐位郡島村、出版は東京 |
| 神代五種蚕放飼之伝 | 武田多一 | 千鐘房発兌/販売北畠茂兵衛 | 1875 | 東大、蚕糸文庫 | 国会所蔵『放飼養精術之方法説：神代産五種蚕』と同書か。 |
| 湖州養蚕書和解 | 開拓使 | | 1876 | 国会 | 出版地記載なし |
| 育蚕要旨和解 | 董開栄／中島亮平訳 | 開拓使 | 1876 | 東大、国会 | 出版地記載なし |
| 蚕養全図 | 西村藤太郎 | 小林泰次郎 | 1877 | 国会 | 両者とも東京 |
| 養蚕適要　全３巻 | コイー述／静岡県士族・永井保興編 | 玉海堂 | 1877 | 国会 | コイーはフランス人、工部省製糸場勤務、出版は東京 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 野蚕養法　山蚕或問上下巻 | 尾崎行正・行雄 | 尾崎行正・行雄 | 1877 | 国会、蚕糸文庫 | 両者とも東京、売捌書肆丸屋善七、穴山篤太郎ほか１名 |
| 和布涅児養蚕説（写本） | 佐々木長淳 | | 1877 | 東大 | 百工全書、佐々木長淳による写本、「譯書中誤字及ヒ了解シカタキ部分ハ假リニ朱ヲ以テ加筆ス 明治十年六月 佐々木長淳」とある |
| 開拓使本庁　蚕織報文 | | 開拓使勧業課 | 1877 | 東大 | 北海道 |
| 蚕桑輯要和解 | 沈秉成 著、中島亮平 訳 | 開拓使 | 1877 | 国会 | 出版地不明 |
| 養蚕手引草 | 宮城県士族・山内多物 | 三養舎 | 1878 | 国会 | 両者とも宮城県仙台 |
| 養蚕伝書 | 山下のよ | 内藤伝右衛門 | 1878 | 国会 | 両者とも山梨県甲府 |
| 開明養蚕往来 | 鶴田真容 | 小森宗次郎 | 1879 | 三好書 | 詳細不明 |
| 告四番諭達書、養蚕製糸改良準序書、桑苗仕立方之心得書 | 石川県 | | 1879 | 東大 | 石川県 |
| 女子宝鑑 | 東京府士族・飯尾次郎 | 汗牛堂 | 1879 | 国会 | 両者とも東京 |
| 続養蚕新論　全３巻 | 田島弥平（邦寧） | 出雲寺萬次郎 | 1879 | 蚕業大辞書、国会 | 著者は群馬県、出版は東京 |
| 養蚕益書 | 内藤理勇 | 内藤理勇 | 1879 | 国会 | 長野県穂積村 |
| 養蚕清涼摘要 | 京都府士族・浅田豹作 | 高毅館 | 1879 | 国会 | 両者とも京都 |
| 養蚕清涼摘要大意 | 京都府士族・浅田豹作 | 高毅館 | 1879 | 国会、蚕糸文庫 | 両者とも京都、三好書によれば『養蚕清涼摘要』を簡略化したもの |
| 養蚕問答 | 坂似水 | 坂似水 | 1879 | 国会 | 著者は長野県神林村 |
| 蚕桑図解 | 百々三郎 | 広島県勧業課 | 1880 | 国会 | 出版は広島県 |
| 山繭筒飼養法概略 | 水谷潜蛙 | 水谷潜蛙 | 1880 | 国会 | 著者は兵庫県新宮村 |
| 養蚕扱方 | 福島県・原著川勝隆義釈述 | 同益舎 | 1880 | 国会 | 両者とも福島県、兌換書林穴山篤太郎 |
| 印度種天蚕飼養心得 | 小林竜三 | 愛媛県 | 1881 | 国会 | 著者は岡山県富西谷村 |
| 蚕養之導 | 田村義事 | 田村義事 | 1881 | 国会 | 著者は山梨県相興村 |
| 新選養蚕事実 | 渡辺留之助 | 渡辺留之助 | 1881 | 国会 | 著者は福島県信夫郡 |
| 養蚕実験録 | 長野県平民・木内清平 | 木内清平 | 1881 | 国会 | 著者は長野県大沢村 |
| 秋蚕四化養法大意 | 愛知県平民・小柳津忠民 | 小柳津忠民 | 1882 | 国会 | 著者は愛知県 |
| 蚕糸提要 | 愛媛県士族・村上是哉 | 蠖屈舎/内藤伝右衛門 | 1882 | 国会、蚕業大辞書 | 村上は山梨県西山梨郡紅梅町寄留 |
| 蚕桑独まなび | 三重県平民・野村義雄 | 有隣堂 | 1882 | 国会 | 著者は三重県度会郡、出版は東京 |
| 清涼養蚕早案内 | 橋垣長兵衛 | 桑谷園不老城 | 1882 | 国会 | 著者は丹後国加佐郡 |
| 通俗養蚕秘方　上下巻 | 埼玉県平民・島村伝五郎 | 文港堂/埼玉県平民・蜷川国蔵 | 1882 | 国会 | 両者とも埼玉県 |
| 培養蚕種養蚕便要 | 長野県小県郡古安会村上田続養蚕場・竜野徳太郎 | 竜野徳太郎 | 1882 | 国会 | 著者は愛知県渥美郡寄留、出版は愛知県 |
| 養蚕略説 | 藤野慶治 | 宮城県 | 1882 | 国会 | 出版は宮城県 |
| 蚕事真説　全３巻（上・中・下） | 埼玉県平民・萩原杢衛述 | 長島為一郎 | 1882 | 農工大、国会。蚕業大辞書 | 両者とも埼玉県 |
| 温養蚕事図解　全４巻 | 福島県平民・鈴木弥作、福島県平民・浅野徳右衛門 | 福島県平民・金子葡萄 | 1883 | 国会 | 両者とも福島県 |
| 開化女用文・開化女消息往来・開化養蚕往来 | 鶴田真容　他 | 小森宗次郎 | 1883 | 国会 | 出版は東京、1879の三好書に掲載の「開明養蚕往来」と同内容か。 |
| 蚕飼方法宝之庫 | 群馬県平民・高橋久八 | 高橋久八 | 1883 | 国会 | 著者は群馬県 |
| 火力養蚕新編　上下巻 | 福岡県平民・土岐曹次郎 | 右田博文堂 | 1883 | 国会、蚕業大辞書 | 両者とも福岡県 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 栽桑実験録 | 船津伝次平 | 農務局/有隣堂 | 1883 | 国会 | 著者は群馬県、出版は東京 |
| 蚕桑要説 | 広島県士族・百々三郎 | 経国館 | 1883 | 国会、蚕業大辞書 | 著者は広島県福山、発売書林は松村善助（広島）、1890増補第２版 |
| 蚕病論：完 | 佐藤林之助 | ― | 1883 | 東大 | 出版地不明 |
| 天蚕養法新説 | 岡山県平民・桜井広政、岡山県平民・塚元武平治 | 桜井広政 | 1883 | 国会 | 岡山県貞永寺村 |
| 柞蚕飼養 | 愛知県士族・伊藤歌蔵 | 楽寿堂 | 1883 | 国会 | 両者とも愛知県 |
| 養蚕心切飼初心伝習記 | 群馬県平民・佐藤国太郎 | 佐藤国太郎 | 1883 | 国会 | 著者は群馬県富岡町 |
| 養蚕実験録 | 平出富士太郎 | 鈴木昌平 | 1883 | 国会 | 著者は神奈川県、出版は東京 |
| 養蚕飼養法 | 岩手県平民・佐藤庄五郎 | 佐藤庄五郎 | 1883 | 国会 | 著者は岩手県里川口村 |
| 養蚕方法注意録 | 降旗謙三 | 高美甚左衛門 | 1883 | 国会 | 両者とも長野県、諸国専売書林は全国の近世期からの書肆多数、穴山篤太郎もいる |
| 栽桑実験録 | 船津伝次平 | 農商務省農務局/有隣堂（穴山篤太郎） | 1883 | 国会、蚕業大辞書 | 著者は群馬県、出版は東京 |
| 日本養蚕沿革論 | 半井栄演述/為半小人編 | | 1883 | 国会 | 写本、同タイトルは、『大日本農会報告』23、24、25、28号にて掲載したものをまとめたもの。 |
| 印度種天蚕飼養手引草 | 岡山県平民・香山賢明 | 香山賢明 | 1884 | 国会 | 著者は岡山県 |
| 蚕家創業要覧 | 佐賀県士族・森田真 | 森田真/大日本農会常総支会 | 1884 | 国会 | 著者住所は、茨城県東茨城郡水戸、印刷は大日本農会印刷場 |
| 蚕仕立法秘伝：一名・かいこ大当り法 | 埼玉県平民・吉田左馬太郎 | 書籍行商社 | 1884 | 国会 | 著者は東京寄留、出版は東京 |
| 蚕桑生理問答 | 農商務省技師・練木喜三 | 農商務省農務局、版権：穴山篤太郎 | 1884 | 国会、蚕業大辞書 | 群馬県の養蚕家・田島武平の問いに答えたもの。 |
| 実験養蚕泝原　上中下巻 | 宮沢義雄 | 宮沢義雄 | 1884 | 国会、蚕業大辞書 | 著者は宮城県仙台、佐々木長淳撰文 |
| 柞蚕飼養実験録 | 下村規一著/半井栄補訂 | 有隣堂 | 1884 | 国会 | 著者は長野県上伊那郡、補訂者は愛媛県 |
| 柞蚕飼養法 | 長野県平民・矢沢善四郎 | 矢沢善四郎 | 1884 | 国会 | 著者は長野県 |
| 養蚕絹篩　上下巻 | 成田重兵衛 | 有隣堂 | 1884 | 国会、蚕糸文庫、三好書 | 近世期養蚕書の復刻版。有隣堂勧農叢書、出版は東京 |
| 養蚕教育道理 | 長野県平民・飯島喜左衛門 | 喜昌堂 | 1884 | 国会 | 両者とも長野県 |
| 養蚕心得 | 群馬県平民・黒澤幹次郎 | 黒澤幹次郎 | 1884 | 国会 | 著者は群馬県八斗島村 |
| 養蚕製糸法 | 東京府士族・中里左太郎 | 東京府士族・水谷伊之助 | 1884 | 国会 | 両者とも東京、上田屋より1887第2版 |
| 養蚕生理編：附実験之記 | 工藤喜六 | 工藤喜六 | 1884 | 東大 | 著者は長野県小県郡塩尻村、觀桑堂藏梓とあり |
| 養蚕日誌 | 山梨県平民・八田達也 | 八田達也 | 1884 | 国会 | 著者は山梨県鵜飼村 |
| 養蚕ひとり案内：得失問答（上） | 長野県平民・森金蔵 | 森金蔵 | 1884 | 国会 | 著者は長野県埴科郡杭瀬下村 |
| 養蚕弁論 | 石川県蚕種大総代・丘村隆桑 | 仁至堂/丘村隆桑 | 1884 | 国会 | 著者は石川県金沢常磐町 |
| 養蚕補育必携 | 埼玉県平民・奥平栄宜 | 埼玉県平民・内田恒吉 | 1884 | 国会 | 両者とも埼玉県 |
| 養蚕方法注意手引録 | 長野県平民・降旗謙三 | 長野県平民・青木善三/中川軒 | 1884 | 国会 | 著者は長野県東筑摩郡 |
| 滋賀県農事問答 | 船津伝次平 述 | 滋賀県勧業課 | 1884 | 国会 | 出版は滋賀県、附録に「養蚕の教」 |
| 独逸農事図解　第10 | ファン・カステール訳/鳴門義民、平野栄 | 内務省 | 1884 | 国会 | 内務省、発売書肆は穴山篤太郎 |
| 独逸農事図解草稿 | 平野栄　他 | 内務省 | 1884 | 国会 | 内務省、発売書肆は穴山篤太郎 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 万国蚕業彙聞 | 青森県平民・菊池広治編訳 | 東京府士族・小松精一 | 1884 | 国会、蚕業大辞書 | フランスとアメリカの養蚕雑誌を訳して編輯したもの、訳者は青森県、出版は東京 |
| 群馬蚕種規則類集 | 川口鋼，斎藤鎌雄閲 | 保全舎 | 1885 | 国会 | 全て群馬県前橋市 |
| 蚕事摘要 | 宮内省御用掛・佐々木長淳 | 宮内省 | 1885 | 東大、信大、国会 | 両者とも東京 |
| 蚕の蛆 | 駒場農学校助教・理学士・福井県士族・佐々木忠二郎 | 丸善 | 1885 | 国会 | 両者とも東京、販売書林は、丸屋書店・穴山篤太郎ほか６つ |
| 蚕場必読　初編 | 長野県平民・松尾勘吾 | 松尾勘吾 | 1885 | 国会 | 著者は長野県 |
| 蚕桑事記 | 鹿児島蚕糸講習所 | 鹿児島県 | 1885 | 国会、蚕業大辞書 | 両者とも鹿児島県 |
| 夏蚕養法茶話 | 吉川文三郎 | 吉川文三郎 | 1885 | 国会 | 著者は長野県玉川村 |
| 独案内養蚕実験録 | 長野県平民・松崎太郎 | 有隣堂 | 1885 | 国会 | 著者は長野県小県郡上田下之條村、出版は東京 |
| 養蚕大意 | 福井県勧業課 | 福井県 | 1885 | 国会 | 両者とも福井県 |
| 養蚕手引草 | 鹿児島県士族・川畑梓 | 鹿児島県平民・富山仲吉 | 1885 | 国会 | 両者とも鹿児島県 |
| 蚕事分業論 | 群馬県平民・田島定邦 | 東京鴻盟社 | 1885 | 農工大、蚕業大辞書 | 著者は群馬県佐位郡島村、出版は東京 |
| 実験新説　蚕桑秘録 | 静岡県平民・岡部竹次郎 | 岡部竹次郎 | 1886 | 国会 | 著者は静岡県 |
| 蚕業講話筆記 | 宮内省奏任御用掛・佐々木長淳 | 群馬県 | 1886 | 国会、蚕業大辞書 | 出版は群馬県前橋 |
| 蚕業講話筆記 | 農商務省御用係・練木喜三述／鈴木算三郎記 | 福島県勧業課 | 1886 | 国会、蚕業大辞書 | 出版は福島県、福島県議事堂での講話筆記。巻末に蚕桑病理問答。 |
| 蚕業幼穉問答 | 三重県平民・羽場玄良 | 羽場玄良 | 1886 | 国会 | 著者は三重県久下村 |
| 養蚕新説 | 福島県平民・佐藤源之助 | 佐藤源之助 | 1886 | 国会 | 著者は福島県、売捌書肆穴山篤太郎、内藤伝右衛門ほか２名、1887増補２版、1888刊行分は蚕糸文庫にあり。1892増補第４版 |
| 養蚕繁殖手引草 | 神奈川県平民・和田光郷 | 奥津猪重郎／武蔵国西多摩郡平井村八幡社事務所 | 1886 | 国会 | 出版は武蔵国西多摩郡 |
| 蚕事輯説 | 山梨県平民・八田達也／佐々木長淳校閲 | 八田達也／内藤傳右衛門（温故堂） | 1886 | 東大、国会、蚕業大辞書 | 両者とも山梨県 |
| 蚕病講莚筆記 | 農商務一等技手・練木喜三述 | 群馬県 | 1886 | 国会、蚕業大辞書 | 出版は群馬県 |
| 中外蚕事要録 | 大分県平民・伊東茂右衛門 | 伊東茂右衛門 | 1886 | 東大、農工、国会、蚕業大辞書 | 著者は大分県、売捌書店は丸善、有隣堂、中近堂、1887再版、1888第3版 |
| 農桑備考　温蚕飼養録 | 神奈川県平民・梶野敬三 | 梶野敬三 | 1886 | 国会 | 著者は神奈川県 |
| 蚕糸改良新説 | マイヨー／京都府平民・今西直次郎　訳 | 京都府平民・八木半三郎 | 1886 | 国会、蚕業大辞書 | 原著はフランス。両者とも京都府 |
| 蚕糸業摘要 | 今西直次郎纂訳 | | 1886 | 蚕糸文庫、東大 | 出版は東京、蚕糸文庫所蔵は第１巻、東大所蔵は第２巻 |

註）①所蔵確認先の表記は、国会＝国立国会図書館　蚕糸文庫＝大日本蚕糸会蚕糸文庫所蔵、農工大＝東京農工大学図書館、東大＝東京大学図書館、信大＝信州大学図書館、蚕業大辞書＝加藤知正編『蚕業大辞書』（勧業書院、1908年）、三好書＝三好信浩『近代日本産業啓蒙書の研究』（風間書房、1992年）を示す。

②外国書の原書は含まず、日本で発行された翻訳本および養蚕書のみの数。備考欄の“両者とも”は、著者・出版地両者を示す。

**注**

（1）奥原国雄『本邦蚕書に関する研究―日本古蚕書考―』（井上善治郎、一九七三年）。

（2）井上善治郎『蚕書研究』二〇〇六年。

（3）中村善右衛門著『蚕当計秘決』（一八四九年）については、『日本農書全集』第三五巻（農山漁村文化協会、一九八一年）、庄司吉之助『近世養蚕業発達史』（御茶の水書房、一九六四年）参照。

（4）井上善治郎「解題一　養蚕技術の展開と蚕書」（前掲『日本農書全集』第三五巻）。

（5）杉仁「経験的合理論への道程―近世の養蚕技術をめぐって」（『史観』第七八冊、一九六八年十一月）。

（6）丹羽四郎「本邦最古の農書と蚕書」（『農業および園芸』三二巻五号、一九五七年五月）、鳥塚恵和男「「養蚕手引抄」成立の覚書」（『埼玉研究』第一巻、一九八二年五月）、松田清・榎本祐嗣・前澤健「わが国最古級の蚕書 武富咸亮著『蚕母要覧』について」（『近世京都』第二号、二〇一六年）、『第七回特別展示　養蚕書と出版文化～養蚕文化はどう伝わったのか～』（厚木市郷土資料館、二〇〇四年）など。

（7）湯浅隆「一八六〇年代のフランスにおける日本蚕書の評価―「養蚕教弘録」仏訳の意味―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第一二六集、一九九〇年三月）、加藤詔士「お雇い仏人教師ムリエによる日本養蚕技術の紹介」（上）、（下）（『日本古書通信』第六十巻七号、八号、一九九五年）、竹田敏『幕末に海を渡った養蚕書』（東海大学出版部、二〇一六年）など。湯浅氏は、ムリエの講演や日本養蚕書について、フランス国内では受け入れられなかったとするが、蚕病克服後のヨーロッパは、蚕室の換気や薄飼を行う飼育法を採用していくことになったとし、翻訳養蚕書が示す19世紀前半の日本の養蚕方法と19世紀後半のヨーロッパ養蚕学会は結果として同じ見解であったとする。

（8）三好信浩『近代日本産業啓蒙書の研究』（風間書房、一九九二年）。

（9）鮎澤啓夫「養蚕古書雑記」（その一～その七）（『蚕糸科学と技術』第一五巻六号～一二号、一九七六年）。

（10）松村敏「解題」『明治農書全集』第九巻（農村漁村文化協会、一九八三年）。

（11）勝亦達夫「蚕書に見られる蚕業講習所の構成要素について―」（『日本建築学会大会学術講演梗概集　F-二　建築歴史・意匠』二〇一〇年）、同「清涼育と温暖育の蚕室の仕組みと構成要素―蚕書による近代蚕室に関する研究（その一）」（『日本建築学会計画系論文集』第七五巻第六四八号、二〇一〇年）、同「折衷育の蚕室の仕組みと構成要素―蚕書による近代蚕室に関する研究（その二）」（『日本建築学会計画系論文集』第七六巻第六五九号、二〇一一年）。

（12）この他、下記にあげた参考文献による追加を行った。一般財団法人・大日本蚕糸会所蔵「蚕糸文庫目録」（大日本蚕糸会HPより閲覧可能）、前掲三好氏著書、加藤知正編『蚕業大辞書』（勧業書院、一九〇八年）、『農書目録』（有隣堂、一八七七年）、農商務省文書課編『農商務省出版図書一覧』（同省、一八九九年）。また、各養蚕書中に記載されている出版社の販売目録については、有隣堂―出野信慶『蚕病予防法解釈』一九〇五年、高橋信貞『蚕糸業道中記』一八八七年、小宮山茂右衛門『桑園改良法』一九〇八年。丸山舎―大森順造『蚕業教科書』第二編、一九〇六年。明文堂―高田重右衛門『高田式栽桑講義』一九〇八年。裳華房―須田金之助『野生絹糸虫論』一九〇四年。勧業書院―洞口猷寿『蚕室蚕具学』一九一一年。六盟館―松下兵太郎講話『簡易経済　松下式全芽育蚕法』一九〇七年。大日本蚕業義会―三宅治太郎『蚕桑問答』一九〇三年。博向堂―佐藤政七『蚕桑実験要録』一八八八年。以文堂―『通俗簡易　桑と害虫』一九〇八年。

（13）前掲『蚕業大辞書』。

（14）前掲『蚕業大辞書』、『東京書籍商組合史及組合員概歴』（東京書籍商組合、一九一二年）。

（15）『蚕業大辞典』と『組合員履歴』では、上京の年代が異なる。

（16）一九一六年以降の明文堂より出版された書籍の奥付より。

（17）前掲『農商務省出版図書一覧』。

（18）東京の出版業者については、磯部敦『明治前期の本屋覚書き 附東京出版業者名寄せ』（金沢文圃閣、二〇一二年）、明治期の出版社と出版傾向については、彌吉光長『未刊史料による日本出版文化』第五巻（ゆまに書房、一九九〇年）を参照。同著によれば、冨山房は、小野梓の始めた東洋館の流れを組み、社名の由来は、良

書大冊を富士山のごとくという小野の伝統を重んじたもので、通俗書の大量販売よりも漢籍や辞典類に力をいれたという。前掲『東京書籍商組合史及組合員概歴』によれば、富山房は一八八六年、坂本嘉治馬が創業。博文館は、大橋佐平が一八八七年に創業、雑誌『太陽』などを創刊。六盟館は杉本七百丸が一九〇三年に創業、主として中等教科用図書を出版し、のちに中等および実業教科書の発行を主とした。興文社は、詳細は不明だが、所在地は日本橋区馬喰町で、社長は石川寅吉、今回の一覧業からは主に教科書類を発行している。

(19) 水谷潜蛙『山繭筒飼養法概略』一八八〇年。
(20) 下村規一『柞蚕飼養実験録』一八八四年。
(21) 香山賢明『印度種天蚕飼養手引草』一八八四年。
(22)『旧勧業寮第壱回年報撮要』（内務省勧業寮、一八七七年）、『勧農局年報』第二回（内務省、一八七八年）。
(23)『日本蚕糸業史』第三巻（大日本蚕糸会、一九三五年）、前掲『蚕業大辞書』。
(24) 高橋久八『蚕飼方法宝之庫』一八八三年。
(25) 鈴木弥作、浅野徳右衛門『温養蚕事図解 巻之一』一八八三年。
(26) 川畑梓『養蚕手引草』一八八五年。
(27) 鈴木貞太郎編『蚕体蚕蛆解剖図説：附蚕病図説』（農務局蚕業試験場、一八八八年）、池田幸之助『実地応用蚕病防禦法』（山田吉左衛門、一八九一年）など。
(28) 拙稿「明治前期における日本養蚕業の技術的動向と「養蚕標準表」」参照。
(29) 荒籾甚兵衛『養蚕教草』一八九一年、斎藤清吉『蚕室必掲蚕飼の栞』一八九二年、持田栄三郎 編『蚕児飼育標準表』（儀満吉太郎、一八九五年）など。
(30) 松永伍作『普通養蚕術講義』（金子健次郎、一八九一年）、練木喜三『養蚕演説筆記』（石西尚一、一八九一年）。
(31) 佐々木長淳『巡県蚕桑講話』（一八九四年）によれば、同書を記す理由として「明治十八年依頼諸処巡廻して蚕桑の学業を講話絵説せしに至る処皆な筆記成らざるなし。蓋し是の多くは一小部のみ故に…蚕桑の全体を論求せんと欲して蚕務問答を著はし…未だ其局を結ばざりし。然るに今ま尚ほ巡廻断えず、筆記亦た益々成りて遂に錯綜に亘らんとす」とし、農商務省の巡廻教師制度だけでなく、農商務省蚕業講習所技術者や各地方の蚕種伝習所長などの講話など、巡廻講話が多すぎる点を指摘している。また、石飛野市『養蚕業実務要書』一九一一年、寺尾昌太郎『蚕糸業講演集』（静岡県西ヶ原衣笠同窓会、一九一一年）などは、各地の講話をまとめた養蚕書である。
(32) 小穴運平『秋蚕詳解』（有隣堂、一八九七年）、竹内茂『改良秋蚕秘書』（遠藤虎雄、一八九九年）、林騂作『通俗蚕業教科書』（丸山舎、一九〇二年）など。
(33) 小島道治『蚕体生理教科書』（興文社、一九〇二年）。
(34) 松田甚之助『実地活用蚕業講習全書』（奥田卯太郎、一九一〇年）、池田栄太郎『桑樹栽培教科書』（明文堂、一九一七年）など。
(35) 倉沢運平『春夏秋蚕応用給桑原論』（明文堂、一九〇八年）、横田長太郎講述『桑樹栽培法養蚕法講話筆記』（山梨蚕友会、一九〇八年）、石田孫太郎『実験夏秋蚕豊作法』（富士書房、一九〇八年）など。
(36) 温故堂と経営者の内藤伝右衛門については、谷口彩子「『経済小学 家政要旨』の刊行事情と内藤伝右衛門」（『日本家政学会誌』第五〇巻一号、一九九九年）が詳しい。

（日本女子大学　学術研究員）

The Japanese Sericulture Industry and Sericulture Techniques Books in Meiji period: An Analysis Focusing Bibliographic information

TSUCHIKANE (DOI) Kazuko

[Abstract] We know that approximately specialized books on sericulture techniques ("sericulture books") were published in Japan in the Edo period. The characteristics of these books are (1) a shift from explanations that contained spiritual elements to practical, experience-based silkworm rearing techniques, and (2) that the authors are mainly

regional silkworm egg producers. In contrast, there are very few references to the features and publication details of sericulture books during the Meiji period. Additionally, periodical journals specializing in sericulture first appeared in the Meiji period—a significant change from the Edo era—but prior research on this topic is also scarce.

This article examines the recent spread and establishment of sericulture and attempts to study the development process of the modern sericulture industry by examining the sericulture books published in the Meiji period. We confirmed that approximately one thousand sericulture books were published by limiting the storage locations searched to a few libraries, mainly the National Diet Library, and searching through bibliographical information using the keywords "silkworm" and "cocoon." Like sericulture books in the late Edo period, the contents of these books chiefly discuss breeding temperature, but the books in the Meiji period also discuss outbreaks in silkworms that can occur with the breeding temperature, methods of improving mulberry tree cultivation, and types of silkworm that breed in summer and autumn. In addition to silkworm egg producers, sericulture books in the Meiji period were written by government officials as well as others involved in general sericulture production. It was not just publishers and bookshop managers in the three major cities of Tokyo, Osaka, and Kyoto that contributed to present-day sericulture technology and the popularization of books on sericulture, but newly formed publishing companies like Yurindo and Meibundō.

[Keyword] Sericulture techniques book, Agricultural techniques book, Yurindo, Meiji period, New publisher